

## 「縮小しながら発展する」地域の創生 新たなコミュニティ創りを目指して

### 要 旨

日本はこれから超少子高齢・人口減少時代を迎える。私たちは価値観を見直さねばならない時代に生きている。東日本大震災から5年が経ち、若い人の意識が根底から変わりつつあり、日本社会を変えていく方向に向かっている。そうした中、課題はいくつかある。一つは、若い人などを生かす環境や世代間の問題。また、「クロースドからオープンへ」という方向性。そして、「閉じる」「開く」のバランスの取り方も大切だ。

一方で、現在の資本主義はベースの部分で変わらざるを得ないのは間違いない。これから縮小する社会の中では、コミュニティ経済、相互扶助経済が軸になるだろう。6次産業化もそこにつながっている。ヒントは、「郡是」の考え方で、「富」の概念にある。何を是とするかを考え、人間世界を超えた大きな循環の世界に接続回路をつくることで、農業は資本主義の新たな方向性を示す一つのモデルとなるだろう。

### 1. 東日本大震災後の変化

川井真（以下、川井）…ここからは、前半で基調講演をされた広井良典先生と西村周三先生のほか、当研究所理事長の内藤邦男、そして中沢新一先生にもご参加いただきます。

中沢先生は、私をご紹介するときにはいつも「人類学者で思想家の」と申し上げています。中沢先生には当研究所の研究パートナーとしてご指導いただいております。もう長いお付き合いですが、中沢先生のご講演が「物理学者であり、数学者であり、宗教学者でもある」と思えてきます。お話をしていると、専門領域がかなり深く広がっていきますので、ご紹介するときに、狭い型にはめてしまうのが心苦しくなってくるわけです。それで、そうした形にとらわれないように、このようなご紹介の仕方をさせていただきます。

さて、東日本大震災から今日でちょうど5年が過ぎました。中沢先生は震災直後に『日本の大転換<sup>(\*)</sup>』という本を出版されましたが、拝読してそのときに思ったのです。「あ、これで日本は変わる。いや、変わらなければいけない」と。ところがあれから5年が経過し、改めて振り返ってみたとき「日本は進むべき道にまだ迷いがあり、足踏みを繰り返しているような状況にあるのではないか」と思います。

なおかつ、まさにこのディスカッション、そして今回のセミナーのテーマにも通じますが、これから日本は超少子高齢・人口減少時代を迎えます。あえて「時代」と申し上げましたのは、一過性のものではないからです。そうした時代にこれから入っていきます。毎年約100万人規模で日本人の人口が減っていくような時代が始まるのです。

また、その背景には、西村先生が先ほどお話

ししてくださったように、高齢化を伴います。だとすれば、私たちは自分たちの生き方や働き方、産業を含めて、自分たちの頭の中を支配している思考、価値観を見直していかなければならない時代を生きているということを考えていかなければいけない、大きな問題だと思います。中沢新一(以下、中沢)：3・11から5年経って「日本が元に戻った」という印象を受けるという話がありました。実際のところは、根底のところはたいへん変わってしまったと思います。変わっていないように見えるのは、変えたくないという人たちが声を強くして、「変えたくない」「今までの価値と同じように進めたい」と言っているからです。マスコミなどでも、そのようなことが非常に強く言われています。その印象によって、私たちは「日本は元に戻ってしまったのか」という印象を受けるのです。ただ、実際に地方に行ってみたり、特に若い人たちの考え

で、それをまとめようとするのが総合政策学部でのビジョンでした。

医療の問題や、経済システムをどの方向に変えていかなければいけないのかという問題も、20年前には萌芽のような状態でした。さらに、今日の話を聞いていると、もう一つの大きい物語というか、システムをつくり始めています。これを、さまざまな表面で起こっている変化の揺り戻しとか、反対方向に動くとかということだけで捉えていると、日本の社会の深い部分で起こっている変化をつかめないという印象を受けました。

確かに5年前と比べて、ある人々は着実に変わってしまっています。それをキャッチしていくことが大切です。その人たちの考え方の変化している方向は、おそらく今後10年、15年、20年と、日本の社会を徐々に変えていく方向に向かっていく主流となるものだと思いますので、

方を聞いてみると、「もう根底から変わってしまったている」という印象を強く受けます。

どのような方向に変わっているかと言うと、まさに先ほど、広井先生と西村先生がお話しいただいた方向に確実に踏み込んで変わってしまったって、ある部分においては「ちょっともうこれは引き返さないだろうな」というくらいの変化が生じてきています。マスコミなどで語られる言葉だけを鵜呑みにせず、実際に東京や大阪以外の日本の各地で活動している人たちの考え方を聞いてみると、ある部分は根底的に変わっているという印象を受けるのです。

広井先生のお話を聞いていて、僕は20年前を思い出しました。僕が中央大学に初めて大学の教員として就職したとき、総合政策学部という新しい学部が立ち上がりました。そのころは、今、社会の表面に知的な体系として現れ始めているようなものが萌芽のようにしてあったとき

私はそんなに悲観していません。

(\*) 中沢新一(2011)「日本の大転換」集英社(集英社新書)

川井…ありがとうございます。中沢先生とは常々、日本のこれからについてお話もしていますが、具体的にご意見を聞いたのは初めてです。私にとっては少し励まされる思いになりました。

ただ、正直に言いまして、私も地域に入ってからさまざまな人たちの声を聞き、全体としてそうした雰囲気を感じる一方で、まだ何か大きな圧力のようなもの、動きを封じ込めているような強い圧力のようなものを、皆さんが感じながら生きていくような雰囲気も感じられるときがあります。その点について、中沢先生はどのようにお考えでしょうか。

中沢…それは僕が自分の人生ですつと感じ続けていることです。どの共同体、どの社会に行っても、その圧力は常に働いています。ただ日本



広井 良典氏

の場合、地域差が非常に大きくて、その圧力が非常に強いところや、ちょっとかさぶたが取れてしまっているようなところなどもいくつか出て始めています。僕が川井さんと一緒に歩いている場所では、圧力が少し外れかかっているところが多いと思います。

そうした場所を中心になっているのは僕らの世代ですが、話をしていると、こちらの考え方と相手の考え方が即座にツーカーになっていく場所がいくつかあります。逆に、話がまったく通用しない場所もあります。僕は山梨県民ですが、地元にいると、話を通じないという体験がものすごく多いです。一方、たとえば、三重県や東北の人たちと話をしていると、「これももう、自分たちは変わらざるを得ない」というところに押し出されてしまっていて、圧力どころではなくなっているというところがいくつかあります。

この圧力がいつまで続くか。今、この圧力はアベノミクスやさまざまな問題とも連動しながら動いていますが、おそらくは変化の兆しは見えないのではないのでしょうか。

## 2. 「ファストからスロー」、 「クローズドからオープン」に

川井…さて、先ほど広井先生から学生のお話がいくつか出てきました。新しいものに気がついて一歩踏み出そう、あるいは、言葉にはしづらけれども何かを自分で感じ取って「今の方向はちょっと違うから、自分は違った生き方をしよう」という学生や子どもたちが増えてきているような感じがします。今の問題と絡めて、何かご意見をいただけますか。

広井良典（以下、広井）…私も中沢先生のご発言に、かなり勇気づけられたというか、希望を感じました。

現在の日本社会ほど、それぞれの世代で生きてきた時代が違う社会というのは珍しいのではないかと思います。ある意味で世代差が非常に大きいと思うのです。欠乏や貧困を、身をもって体験した高齢の世代もいれば、戦争も含めて高度成長期の真ただ中を走ってきた世代、それから今おっしゃったような世代です。

ちなみに私は、就職した頃、今では死語になっていますが「新人類」と言われていました。会社の仕事よりプライベートを優先するなど、過渡期の入り口だったと思いますが、今はまたさらに進化しています。

つまり何を言いたいかというと、生きてきた時代が非常に違うので、世代による価値観がかなり違っていて、一方では、アベノミクス的な高度成長期の成功体験が染みついていて、良くも悪くも「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と言われた頃の感じでやっていけばうまくいくの

だ」と強く思っている世代の人たちが、わりとまだ力を持っています。

かたや若い世代は、高度成長期の成功体験とはまったく違う時代を生きてきていて、かなり違った思考を持っています。現在はある意味で非常に大きな過渡期で、言い換えるとせめぎ合いの時代のような状況であるのではないかと思います。

ただこれに関しては、時代の構造として変わっていかざるを得ないのではないかと思えます。高度成長期的なパラダイム、世界観から、私は「定常」という言葉をよく使っていますが、そのような方向に変わらざるを得ません。言い換えれば「ファストからスロー」。この移行は、私は確実に進んでいくと思います。

さらに言えば、ご存知の方も多いかと思いますが、江戸時代の終わりから明治の初めに日本を訪れた外国人は、口をそろえて「これほどの

んびりした、働こうとしない人々を見たことがない」と言いました。ですから、「日本人が勤勉だ」というのも時代の産物です。

勤勉さ自体はいいことなのですが、それで過労死するようなことは高度成長期の産物であって、そこがファスト的なものからスローへと変わっていくのではないのでしょうか。

もう一つ、私が危惧しているのは、クローズドとオープンという軸に関することです。「クローズドからオープン」という方向が日本社会にとっては最大の課題ではないかと思うのです。良くも悪くも日本社会の特徴は、稲作の遺伝子というか、ややもすれば共同体ごとに完結するようなところがあります。共同体を超えた開かれた関係性のような、個人としてつながるという「クローズドからオープン」が、「ファストからスロー」と並ぶもう一つの大きな課題ではないかと思っています。

### 3. 6次産業の定常型社会

今、若い世代の動きを見てみると、さまざまに新しい共同体、コミュニティとコミュニティをつなぐような動きも出てきているようですので、希望を持っています。

川井・ありがとうございます。私の好きな本で、渡辺京二さんの『逝きし世の面影』という本<sup>(\*)</sup>があります。その中で、江戸末期から明治初期にかけて海外から日本を訪れた外国人たちの日本への感想がいろいろ述べられています。若干美化しているところがあったとしても、その本に書かれていることは、おそらく純粹に感じた言葉が相当含まれているのだろーと思います。

広井先生は基調講演で、平安時代からの人口の長期的トレンドのデータをお示しくださいましたが、江戸時代は定常型社会ですか？

広井・農業を基盤とする定常型社会です。

川井・先ほどの講演で西村先生が終盤におっしゃっていましたが、柔軟な働き方を可能にする産業構造としての「6次産業」を、これからこういった構図にデザインしていけばいいのかわかることは、すごく重要な問いです。定常型社会に何か大きなヒントがあるように感じますが、西村先生いかがでしょうか。

西村周三（以下、西村）：まだ問題提起の段階で、少し間違ったことを言うかもしれないということとを覚悟の上で聞いていただければ、と思います（笑）。

広井先生もおっしゃいましたが、昔の一所懸命の時代は、「勤勉」ということが間違いない日本の社会にとって大事な価値観だったと思います。「三方良し」の社会もそうです。ただ、今の3次産業のやり方を考えると、朝出勤して、

(\*) 渡辺京二(2005)『逝きし世の面影』平凡社(平凡社ライブラリー)





西村 周三氏

パソコンに向かってゲームソフトを夕方まで一所懸命開発して、勤務時間を終えて帰るのでは、何も新しいソフトは生まれにくいという印象があります。ですから、思い切って働き方を変えるということが、私は一つのキーワードだと思っています。

たとえば、先ほども少し申し上げましたが、1次産業の働き方、2次産業の働き方、3次産業の働き方は、相当違います。

答えはだいたい予想していますが、あえて広井先生にチャレンジして反論します。「大学を卒業して就職する場所として地方を選ぶという傾向がある」ということでした。私があえて反論すると、若い人はそう思っているでしょうが、その若い人を地方の人が従来の発想で同じように働かせようとすると、長続きしないと思います。それは、自由な仕事の体系をどう構築するかの問題です。

やはり人口減少社会というのはけっこう深刻なのです。どうしてかと言うと、団塊の世代が数で勝負して、自分たちの昔の高度成長の発想を未だに叩き込んだまま、若い人に「同じことをやれ」と言うようなことをやりかねないからです。わかりやすく言うと、8時半勤務に遅れてきたら、「おまえはけしからん」というような対応はもう違うのです。「遅れてきてもいいけれども、その代わり、その分、何かきちんと成果を出せよ」というような発想に変えないといけません。

昔の勤勉とは何でしょうか。最近の学校では、二宮金次郎さんの背中に薪を背負いながら道を歩くというのは、危険だからよくないという話があるが盛んになっているようです。

いろいろな意味でまだ茫漠としているのですが、たとえば具体的にそうした一つの問題を取り上げて、これからの新しい時代について、「勤

勉って何だろう」というように考えてみる。そのようにいろいろ独自の発想をしながら考えていくことです。地方で活性化しているところは、たとえば定年制がない企業がかなりあるなどいろいろユニークな事例があります。特に、若い人に自由闊達に働いてもらう社会、あるいは地域をどのようにつくるかということは、一つの課題ではないかと思っています。

川井…ありがとうございます。今のお話の問題は、最初の中沢先生のお話の中で、新しい動きに対してブレーキや圧力をかけるようなものも存在すると言われたものと、若干つながるところがあるのででしょうか。

中沢…人間は、若いときに叩き込まれた価値観がけっこう持続するので、高度成長期・青春期に叩き込まれた価値観はずっと持続する傾向があると思います。また、年を取ってから、自分が大事だと思っていた価値観を、若い世代から

無下に否定されるのは非常に腹立たしいことでもあります。それは自分でもよく体験することです。しかしそれは、ある時代の一時の幻想を自分の中に刷り込んでいるだけなのだと思うようにしています。

社会全体からみると時間差は必ずありますから、世代ごとの軋轢はずっと存在しています。エジプトのピラミッドに書いてあった有名な落書きがありますね。「最近の若者はなっていない」。古代のエジプト人でさえそうだったわけです。考えてみると、エジプトよりもっと前からそうだったと思います。社会がもつと安定している、世代ごとの価値がそんなに流動化していない社会であったとしても、エジプトは当ても都市で、都市では必ず流動化が起こっていますから、それが発生しています。そして、今の状態でもそうなっています。ですから、圧力があつたり、それを押し戻そうとしたりする

たが、その言葉だつて、鎌倉の武士たちがワーツと登場してきて、そのときに初めて言語化され、可視化されたのです。それまでは日本人の中に「二所懸命」という考え方はありませんでした。「二所懸命」というのは、要するに「一つの場所を命をかけ、一つの主の下に命をかける」ということですが、以前はそのような考え方がなかったのです。ただ、時代の大きな流れの中で封建制に向かつていったとき、そうしたものが蓄積されていきました。ですから、みんなにはそれが見えないのです。

ところが、ある日突然、可視化されて現れる。そうすると、変化が急速に波及してくるという現象が起こるのだと思います。今の資本主義のシステム自体はいろいろ問題を抱えていて、それをどちらの方向に変えていくのか、まだよくわからないのです。ただ、今まで「よし」とされ、前提とされていたことが、もう前提にはな

力の揺り戻しというのは、常に存在しています。ただ、社会全体が変わっていく方向性は、それとはまた違うのです。ある世代の人がこう思っていたとしても、社会はどのように進みます。これからの社会がどちらの方向に確実に進んでいくかというと、必ず、縮小していく社会に向かつて行かざるを得ません。そうなったときは、その人が自分の価値観でこう思っている方がいいが、そんなことは関わりなく、社会・世界はある一定方向に変化していくことになると思います。

その一定方向の変化の先には、現在の資本主義が、かなりベースの部分で変わらざるを得ない局面になります。今はそれが見えない状態ですが、それが可視化されて見える状態が現れると思います。人間の世界ではそれが突如現れるのです。

先ほど「二所懸命」という言葉が出てきません。先ほども触れた東日本大震災を機に大きく変わり始めた動きは、「世代間の中の食の違いを貫くもの」「その世代に関係しないもの」ととらえてよいわけですね。

中沢・はい。たとえば西村先生よりずっと保守的な若者は大勢いますから、世代は関係ないと思います。ただ、世界全体が大きく動いていることは間違いありません。今は、それをいち早く言語化して目に見える形にできるかどうかという「臨界点」に本当にきています。これはまだ誰も成功していません。

川井・今、お名前が出ましたが、西村先生は今の資本主義の動きに、ある程度の矯正・修正をしていかなければいけないというお話だったかと思えます。経済学者としての西村先生から見て、今の現実、産業・経済のあり方はどうでしょ

うか。

西村…ちよつと不安にさせるかもしれない話をします。結論から言うと、これから日本の社会は交易プレッシャーから解放されるべきです。これは若干、広井批判に聞こえるかもしれませんが、何か外から入れてもつと農業生産物を輸出しろということに反対ではありませんが、モノが出て行くときは同時に人も出て行かないといけません。

これは、お二方とも知っているマルクスが言っている話なので、「お前、いい加減なことを言うな」と言われるかもしれませんが、モノの出入りと人の出入りがバランスを取っていかないといけません。単にモノがたくさん入ってきたらいいとか悪いとか、出て行ったらいいとか悪いとか、そうした時代ではなくなってきています。

ただ、実は経済学ではずっとそのように教え

ウイン生まれ。ブタダスト、ロンドン、アメリカ、カナダにも居住。「ハ  
ンガリ革命」で連合政権法相。ウインで総合誌編集主幹。オタク  
スフォード大学、ロンドン大学で講師などを歴任。主な著作に「天転換」  
「経済の文明史」など。

#### 4. 「閉じて開く」のバランス

(1) 「対馬」というフィールドで学んだこと

川井…柔軟性と流動性のある社会という意味でもあるのでしょうか。中沢先生と当研究所が進めている研究フィールドに、国境離島の長崎県対馬市があります。実際、その人たちの暮らしぶりを見ると、半農半漁で1次産業が優位です。ただ、歴史的に見ても、過去からずっとその経済を支えていたのは、隣の国との流れてつながっているのです。江戸時代もそうですが、あのまちを眺めていると、私は非常に柔軟で流動的だと思うのです。そのあたりについて、中沢先生からひと言お願いします。

中沢…僕は、実際に対馬に行って人と付き合い

てきました。交易の利益、比較優位などをいろいろ教えてきたのです。これが今、大きく変わってきています。中沢さんがおっしゃる一つのポイントは、まさにそういうところではないかと思えます。

しかし、かといって、閉鎖的であっていいかどうかは別で、違うと思います。やはり人が出たり入ったりするのは、今、中国の方がたくさん来られています。これも中国との今後の交流の大事な一つのきっかけであって、人が出入りするのです。「では、IS (Islamic State) とも出入りするのかわ」と問われたら非常に難しい問題ですが、その意味でも資本主義の大きな転換期が来ています。

講演では時間の関係でポラーニ<sup>(\*)</sup>の話を紹介できませんでしたが、そのような発想が大事ではないかと思っています。

(\*) Karl Polanyi (1891-1964) 経済人類学の創始者、オーストリア

ながら調査などをする前は、隣の国、韓国の影響をかなり受けてしまっているのだろうと思っていました。現在の観光客の数にしても、釜山<sup>プサン</sup>から来る観光客が約19万人です。日本から行っている観光客は2万人とか3万人でしょう。その数字だけ見ると、「えっ？」という印象でした。文化はまさに日本の文化そのもので、むしろ本土や九州に残っている文化以上に原型的な日本文化だからです。メンタリテイにおいても同様で、「対馬は朝鮮半島と大陸に向かって開いているけれども、根底においては閉じているのだな」と、たいへん強い印象を受けました。

世界中の成功している観光地は、たいがいものすごく自分を閉じています。一番すごいと思ったのはバリ島です。バリ島の人たちは、外国人・観光客・ツーリストに対して、ものすごく愛想がいいのです。自分たちの文化も、「はい、見てください、見てください」とやってい



中沢 新一氏

るけれども、自分たちのプライベートな生活あるいはコミュニティ生活に関わると、一切入れません。見せる部分は平気で見せているのですが、根底の部分は見せないようにしています。この「閉じて開く」というのが、これからの日本のあり方にとって非常に大事です。今は、とにかく「開いて、労働力を外国から取り入れろ」「農業は打って出ろ」と言っています。どんどん「開け、開け」としているのですが、これは同時に、「閉じる」というものとのバランスを取りながらやっていかなければいけないという印象を強く受けます。

特に日本は海洋国ですから、自然条件としては、長期にわたって閉じていることが可能でした。同時に、周りがすべて海であるということは、全部開いているという意味でもあって、日本人のメンタリテイの根底には、「閉じる」「開く」というのが、ある種のバランスを取ってで

きていたと思います。

江戸時代の定常型社会は、この「開く」と「閉じる」のバランスをかなり意識的にコントロールできていたと思います。明治時代も実は、わりあいコントロールが効いていました。和魂洋才という言葉がしきりになされましたが、あれも「和魂」で閉じて「洋才」で開くというやり方で、単なる実利主義のように見えますがそうではないのです。この海洋国家で島国である日本が健康に豊かに育っていくためには、「閉じて開く」のバランスが必要だという認識が常に存在していました。

今、たとえばTPPの議論で、開くのか閉じるのかという非常に極端な議論が一気に湧き上がって展開しましたが、実際には完全に閉じることもできないし、完全に開くこともできない。完全に開いたときに何が起るかというと、現在のヨーロッパの状態がヒントになります。

ヨーロッパ域内で開いただけですら、今日のよ  
うな状態がもたらされていて、EU経済はシス  
テムとしてあと10年もつかどうかわかりません。  
日本人が自分でどのようなメンタリテイをつ  
くっていかなければいけないかということにお  
いて、「閉じて開く」というバランスと運動が  
ものすごく大事なだろうというのが、対馬  
へ行った僕の実感です。

## (2) 「縄文」と「弥生」

川井：中沢先生のお話は、先ほど広井先生がおつ  
しゃった、オープンとクローズドの問題とまさ  
に合致してきますが、広井先生、よろしいでし  
ょうか。

広井：今の中沢先生の「閉じて開く」というお  
話は、今日の一つの大きな中心的なテーマにな  
ると思います。これはある意味でコミュニテイ  
論の永遠のテーマのような面でもあると思いま



すが、一つ注意する必要があるのは、外面的に海外に出たら開いていて、ローカルに過ごしていたら閉じている、という話ではないだろうということです。

わかりやすい例では、地域でローカルな自然エネルギーに取り組んでいる若者の意識は、行動はローカルにやっているけれども、ある意味で意識は非常に開いていると思います。逆に、高度成長期の商社マンの例を考えると、海外にはほとんど行っているけれども、背負っているのは「日本丸」のような感じで、意識はけっこう閉じていたりします。ですから、貿易をしていたり海外にたくさん行っていたら開いていて、ローカルに根ざしてやっていたら閉じているということではけっしてありません。まず、ここは押さえておく必要があると思います。

それを踏まえた上で、「閉じて開く」というのは、特に日本人にとって永遠のテーマとも言っています。一つの中心テーマでもあるのではないかと考えています。

川井・縄文と弥生と出てしまったら、聞かないわけにいきません。中沢先生、ひと言よろしいでしょうか。中沢・日本史、ことに戦後の歴史は、つくられてしまったイメージがものすごく大きいと思います。弥生というのは農業社会で内側に集約して、縄文の狩猟社会は流動的、狩猟採集は移動していくのだというイメージが徹底的につくられているのですが、これはほとんど現実にそぐわない考え方です。

まず、縄文人というのは定住社会です。最初は、日本列島に海から入ってきているのです。北からは陸地を伝わって入っていて、狩猟社会ではありますが、定住なのです。そして、畑をつくっています。この畑はかなり組織的につくられています。縄文の初期の社会というのは、

えると思います。一方で、基調講演の中でもローカルな経済循環と言いつつ、他方で共同体を開いていく必要があるという、一見矛盾することをお話ししたかと思います。

私から見ると、日本社会はともすれば閉じていく「稲作の遺伝子」、稲作の2000年の歴史から出てきたある種の行動パターンのようなものがあります。かたや、これは中沢先生に伺いたいところですが、縄文と弥生という話にもなってくるかと思えます。西村先生もおっしゃっていましたが、狩猟採集、漁業など多様な形態も持っているのです、一概にそうと言えないものもあります。

結局、人間というのは「閉じると開く」、言い換えると「農村と都市」と言ってもいいかと思いますが、「縄文と弥生」と言ってもいいかと思えます。それら両方が必要で、そのあたりをどのように回復していくかということが、

粟畑をきちんとつくっていて、芋の栽培もきちんとやっているのです。

地球上のいわゆる狩猟採集民族というのは、いつもバンドをつくって移動していたイメージで、「その人たちは自然に加工はしなかった」と言われていますが、「どうもその考えは間違っているようだ」というのが、最近の人類学の研究です。たとえば、「アマゾンのジャングルで人間の手の入っていない場所はどこにもない」と言われています。つまり、インディオがジャングルを自分たちの畑としてつくり替えてきた長い歴史があるということなのです。

日本の縄文社会などは、それ以上にもっと高度な新石器社会ですから、定住しているのです。ただ問題は、田んぼをつくるかつくらないか、これが重大な問題だったのです。田んぼをつくるためには、まず地面をならさないといけない、水利をつくらなければいけないなど、集約的な

作業が必要だからです。狩猟の場合は数人で森へ入ればよかったのですが、今度は共同作業が必要になってくるというところが、米づくりの重大な問題です。

米づくり社会になると弥生と呼ばれるようになるわけですが、弥生文化を持ってきた人たちを見てみると、定住している人たちではありません。日本に稲作を持ってきた人たちはほぼ確定していて、中国の揚子江河口部、浙江省のあたりには倭人と呼ばれる人たちが北上してきて、九州の北部に入ってきて稲作を始めたというの、だいたいの定説になっています。

浙江省にいたときは何をやってたかという、半農半漁です。揚子江河口部は世界初の大規模稲作が成功した場所ですから、その稲作を取り入れました。しかも倭人は潜水漁法、海女をしていました。要するに、漁業もやれば農業もやるという人たちが北上して日本に入っ

て、山形の内陸部の人たちも頑強に抵抗していて、そうした大きな流れの中で日本列島と日本人は徐々に徐々になら変わっていききました。その初期の段階を見ると、弥生と縄文というのは、今まで言われていたような話ではないと思います。岡本太郎<sup>(\*)</sup>さんが「縄文」と言ったのは、ほとんどフィクションだと思います。縄文の人だとして、あんなに野性的でパワフルな人たちばかりではありません。気弱な人もひ弱な人もいたと思います。ほとんど違いはないと見たほうがいいのではないのでしょうか。

ただ重大なのは、稲作と、中国にいた人たちが「国家」というものを知っていたということ。国というものを知っていた人たちが九州北部へ入ってきて、それが日本列島に広がっていったわけですが、縄文の人たちで一番重要なのは、稲作をしない。そして国家を持たない。この2つが大きな違いでした。

きているわけです。

ですから、縄文人と弥生人はそれほど違わなかったのではないかと。そうでないと、価値観がこれほど違っていたら、絶対、戦争が起こっているはず。ところがその痕跡はほとんどありません。ことに初期の倭人が稲作を持ってきたとき、九州、現在の櫛田神社あたり、博多祇園山笠をやっているあたりが中心ですが、あそこで縄文の人たちが一緒になってやっています。しかもそのとき、八戸の縄文村の青年団が稲作を見に来ているのです。そして、失敗していますが、八戸に稲作を持って行っています。つまり、稲作が始まったというニュースが日本列島を駆け巡り、縄文人がたいへん関心を持った。この縄文人にもさまざまなタイプがいて、関心を持つ八戸のような先進的グループがいる一方で、北陸の人たちはかなり頑強に抵抗しました。あるいは東北内陸部、秋田や岩手の内陸

日本の農村が、今のような形になってくるのは室町時代の後だと言われているくらいです。農村は一度、班田収授法のような古代システムの中で租庸調システムがつくられますが、あれは一旦チャラになります。チャラになったところで、日本の村というものがつくられ始め、室町時代で「惣村」というものがつくられるようになるわけです。

これが今の農村の原型になっています。惣村は閉じて開いています。惣村では、いろいろ分散していた村を一つにまとめていく組織ができ、共同作業もできるようになりました。すでに貨幣経済も入っています。そして、そこに神社がつくられました。氏神の重要な神社が、各村に一つずつつくられていきます。

そこには「座<sup>(\*)</sup>」というものもつくられて、この座が「講」の元になっていきます。講の中に入った人間は平等になります。平等になって、

相互扶助経済が運用されるようになります。座と講というのは非常に重要なものとしてつくられていきました。その意味では、稲作を行ったときに何が本当の変化として起こったかというのは、実はまだあまり解明され尽くされていないと思います。

(※4) 岡本太郎(1911-1996)芸術家。大阪万博(1970年開催)のシンボルとなった「太陽の塔」CMのコピー「芸術は爆発だ」などで知られる。縄文土器について触れた著作は「日本の伝統 岡本太郎の本」(みすず書房1999年)など。

(※5) 平安時代末期から戦国時代、朝廷・貴族・大社寺・武家(室町時代・戦国大名等)などに従属する身分において、奉仕・貢納を行う代償として与えられた特権をもとに、営業活動を行った商工業者、芸能者、交通運輸業者などの職能者の集団。(国史大辞典)

(※6) 宗教・経済・社交場の目的を達成するために組まれた結集集団で、○○講の名を付けて呼ばれる。(国史大辞典)

## 5. 新たなコミュニティ創りの ありかた

(1) 若者たちの意識の変化と6次産業

川井…ありがとうございます。職の問題からコミュニティ、特にオープン・クローズドという

きました。20代の人たちがいったい何を考え何をしているのか、久しぶりに間近で見ましたが、やはり外に対する関心、好奇心は非常に旺盛です。ただ、表現力の部分、それをどう表現しているのかわからないというのが彼ら彼女らの正直な姿と思いました。

一方、ラオスの首都ビエンチャンの大学生といろいろと話をしていくと、彼らは国内で超エリートですから、意識が非常に高く、それに触発される場所は非常に多かったです。今の日本の若い人も、おそらくそうした機会を与えられれば意識は急激に高まっていくだろうし、中も<sup>は</sup>広がっていくと思います。残念ながら、現実にはそうした機会がなかなかないのでないかと、そのとき感じました。

また、2年ほど前に、10人ほどの20歳くらいの学生が「農業を勉強したい」ということでいろいろな大学から来て、私が先生となって何回

キーワードが出てきて、縄文・弥生まで話さかのぼりました。こう考えてみると、日本人というのは、そもそもコミュニティづくりが上手なわりに、開かれた民族であったというイメージがすごく強くなります。

中沢先生が最後におっしゃったように、稲作から来る細かい発祥の流れのようなものは、まだよくわかっていない部分もあるというお話がありました。内藤理事長はずっと農林水産行政の現場にいてさまざまなものを見てこられたと思います。そういう見地から見ると、全体の流れの中でひと言ご意見いただければと思います。

内藤邦男(以下、内藤)…少し前の、若い人の意識についての話に戻してフォローさせていたいただきたいと思います。

私は3年くらい前に10人くらいの20代の若い人たちを引き連れて、20日間、ラオスに行つて

勉強会をしました。そのときも彼らの意識は非常に高く、しかもボランティアをしながら、なおかつそれをビジネスにしたいという意欲が



内藤 邦男

けっこう強かったわけです。

ビジネスにするにはアイデアが未熟なところもありましたが、「変えたい」「何かをしたい」「何かをやってみて、それをビジネスとして立ち上げていきたい」という意識がありました。そのときに私が思ったのは、彼らのやりたいビジネスというのは、大してお金がかからず、「20万円でも30万円でもいい」「100万円あれば十分」だということです。また、そうした若い人の、未熟かもしれないけれども「やりたい」というビジネスを支援するような仕掛けがなかなかない、ということにも気づきました。そうしたものを試行錯誤していけば、そこからベンチャーやイノベーション、おそらくプロセスのイノベーションなどが出てくるのではないのでしょうか。

若い人は意識が変わってきています。若い人がいろいろなアイデアを持っていることも確かから、若い人の発想を生かしつつ、生産年齢を超えた人たちもサービス提供できるという仕掛けを、どのように早急につくっていくかが大きな課題ではないかと思っています。

川井…そのテーマが入っていないければいけませんね。今の内藤理事長のコメントからも察しがつくように、西村先生の6次産業のお話も、1次産業がなければどうしようもないわけです。そして、1次産業はコミュニティに入っていかなければなりません。先ほどもお話がありましたが、コミュニティの中に入って新たに働きたいという人を受け入れるには、意外にハードルが高いという話もあります。ラオスの話もそうですが、おそらく同じような思考の中で交流できるような「外へ開ける窓口」を、今の若い人たちはたくさん持っているのではないかという気がします。

また、高齢者福祉と農業の相性の良さという

です。ただ、それを生かす環境、生かしてあげる環境というものは、まだまだ少ないのかもしれない。それをつくってあげることが、若い世代に元気が出て、生産年齢を超えた、今後増大する多くの高齢層を支えることになるのではないのでしょうか。

それから、確かに生産年齢人口は減っていますが、それだけを言ってみても仕方ありません。増えていく高齢者、生産年齢を超えた人たちを、サービスを受けると同時に、サービスを提供する層に変えていけば、別の局面になります。単に公的保障や財政資金を投入するだけではなく、彼らがその財政負担を一部肩代わりすることになると思います。

その意味では、西村先生のおっしゃるような、社会全体で支えるようなシステムをつくっていけばいいので、そこに若い人のアイデアも入って来る余地があるのではないのでしょうか。です

のを改めて感じてきます。さらに、時間に縛られない働き方の中で、何となく生きがいと密接したような生産行動というのも、1次産業から見い出せるという思いがあります。

本日のテーマ「新たなコミュニティ創り」というところに、すべて帰結してくるということですが、今のお話を聞いて改めて感じているところです。それを踏まえて、農業、コミュニティ、新しい働き方、若者といったキーワードで、これまでの全体の流れから、広井先生からひと言いただければと存じます。

広井…今、いろいろな論点がだんだん結びついてきている感じです。前半での働き方や西村先生の6次産業、オープン・クローズドの話、資本主義の話も出てきて、先ほどオープン・クローズドともつながる中沢先生の縄文・弥生や相互扶助経済の話があり、若い世代のソーシャルビジネスや高齢者も巻き込んでという話。それぞ



れが全部つながってくるようなイメージがあります。

私としては、自分の中でも熟していない模索中のテーマですが、講演の中で少し申しましたコミュニティ経済、言い換えると相互扶助経済でもあるのですが、このあたりが一つのポイントになってくるのではないかと思います。コミュニティ経済というのは、たとえば高齢者をコミニティの中に包摂していくと同時に、高齢者自身も積極的に参加して、若い世代にいろいろなことを教えたりします。それでもたまたま経済、ヒト・モノ・カネが循環していくというイメージです。コミュニティと経済が融合して、そこに広い意味で雇用なども生まれてきます。それは相互扶助経済で、中沢先生のお話にもあったように、実は日本が元々しつかりと持っていたものです。

さらに話を広げると、本日の主要なテーマでいでしょうか。

ですから6次産業化というのは、ある意味で「懐かしい未来」という言い方もありますが、わりと回帰のような面があり、大きく言うと、それがコミュニティ経済の話ともつながり、資本主義の新たな形ともつながって、全部連動するのではないかと感じました。

## (2) 家族・私有財産とコミュニティの形成

川井・今の広井先生のお話で、「成長しなければならぬ」とは、結果としての成長とは何なのか」という議論に結びついてくるのではないかと感じましたが、西村先生、いかがでしょうか。

西村・おっしゃるとおりです。その前に広井さんがおっしゃった1次・2次・3次産業については、私は注意深く「ペティの定義後に拡大したものが多く」云々と講演資料の脚注に書いて

ある、資本主義と縮小する社会、あるいは定常する社会というのは果たして両立可能なのかという、最も基本的な課題があると思います。そうした大きなレベルで言うと、これから拡大しない資本主義システムのようなことがあるとすれば、相互扶助経済、さまざまな世代が参加するコミュニティ経済のようなものが、おそらく一つの軸になってきます。

6次産業の話もそれにつながると思います。これは問題提起というか、お伺いしたいテーマですが、実は今の1次・2次・3次という産業分類自体が、工業化時代にでき上がったもので、農業を中心とする社会においては、元々1次・2次・3次も全部融合していました。コミュニティの中のケア、相互扶助、生産なども、元々全部1次・2次・3次が融合していて、それが分かれていったのが工業化時代、近代です。それがもう一度、再融合しているのが現状ではな

おきました(54ページ図3参照)が、おっしゃるとおり、すでに1次・2次・3次の分類は陳腐化しています。特に一番大きいのは3次でしょう。3次に雑多なものがいろいろと入っていますので、分類を誰か新しい発想で、というご指摘には本当に賛成です。

さて話を戻しますと、川井さんのご質問に関して、また問題提起をしたいと思えます。話題が飛んで恐縮ですが、私が先ほど強調した点は、昔、エンゲルスが『家族・私有財産・国家の起源』<sup>(\*)</sup>という本を書いています、やはり「家族」なのです。「家族」というのは、今のキーワードでもあるのです。コミュニティはつくりたいし、コミュニティ機能をどう回復するかということとはとても大事な話なのですが、誤解を恐れずあえて極論を言うと、家族がコミュニティの形成を妨げているという面があるような気がしますが、これは中沢先生にお伺いしたいのですが、

「私有財産としての農地がそれぞれの家族の私有財産として確立したのはいつ頃か」というような話からさかのぼって、私たちはもっと知恵を得たいと思います。

なぜかという、先ほど少しお話ししたように、私有財産は本当に移ろいやすいものだからです。都心もそうです。最も古い私有財産争いというのは、農地や土地を巡る争いでした。私には農家の生まれではありませんので、その問題の重要性はわかっていません。ただ、土地を私有財産権として確定したり、いろいろやるのはいいけれども、それを近所の人と一緒に使うというような革新はどうやればできるのでしょうか。

先ほどお話ししました6次産業という提案は、大規模化の提案ではありません。農地を大規模化するというのは、私はあまり好きではありません。とはいうものの、現状、近所同士が助け

いるところもあります。ですから、その私有の問題は、今、かなり大きなテーマとして、目の前に広がっていると思います。

西村・少しだけ付け加えますと、先ほど例を挙げられたように、実は今、かえって東京などの地価が高いところで先鋭化しています。そこをみんなで共同利用して、あるいは防災のためにみんなで共有の場所を持つとか……。

もっと言えば、隣の人が何をやっているかわからないマンションで、一定時間でいいからコミュニティのコミュニケーションができる縁側などの場をつくったり、改造したりする必要がはっきりしているにもかかわらず、やはり「私の財産はいくらで売れる」となってしまう。ですから、そうしたほうが高く売れると言いたいくらい、都心部でさらに先鋭化しています。

川井・中沢先生、それについてひと言ございませんか。

合って、さまざまな行事などをきちんと継承しているのでしょうか。要するに、私有財産があまりにも表に出過ぎて、それがコミュニティの形成を妨げていないのでしょうか。

司会者ではないのに、私が勝手に問題提起してしまいました。答えがわからないので、教えていただければと思います。

川井・先ほど資本主義の話がありました。質問の問題も、成長時代につくられてきたものが結構あると思います。広い農地に山林も抱えるということになっていますから、それが今、飽和状態になっています。ですから、農地はもう完全に休耕地になってしまつて、広ければ広いほど、次第にどこの所有ともわからず宙に浮いてしまいます。

山林などはもっとひどい状態です。どこが区分けかわからなくて、自治体が借り出そうにも借り出せないという状況で、手つかずになって

中沢・土地私有の問題はものすごく大きい問題なので、この時間内ではちょっと話せないと思います。

こうした言い方が正しいかわかりませんが、東京都で一番の大地主は天皇家、皇室です。別に私有しているわけではありませんが、都心部の最も広い土地で、最も先端的な利用をしていると思います。具体的には皇居と、関連した大きい土地に明治神宮があります。明治神宮は神社庁ですが、皇室と深い関係があります。これらの土地は、資本主義的な利用はされていません。千代田区の農民は1人で、天皇陛下だという話もあるほどです。昭和天皇から田植えを始めていますから、1人農民がいるわけです。

土地利用として明治神宮を考えると、ある意味で巨大な鎮守の森で、基本的に資本主義の原理が入ってこないようになっていきます。皇

居も同様で、しかも森林をつくるということが第一前提になっています。明治神宮の森は、明治時代の科学者が計算し尽くしてつくったものです。皇居の中の吹上御苑は、昭和天皇のご趣味で、あとは動植物に任せたとという不思議な土地利用がされています。

ほかの土地に関しては全部、小さい神社のスポットはいくつかあるものの、広い範囲に関しては売買可能になっています。売買可能になるということは、元の私有者の私有権を奪えるということですので。そして何をするかというと、家あるいはマンションを建ててしまう。これは大都会で起こっていることです。田舎へ行けば、耕作放棄地がある一方で、鉄道の線路に近いところでは住宅化されていきます。そうすると、それまでの所有者がそれを手放して、不動産屋が取得して、今度はそれを売っていくことになります。

この問題は、日本の今の最大の問題です。ただ、私有ということ捨ててしまっているのでしょうか。今のような社会で私有権を放棄したら、必ずそれを商品やお金に換えるというシステムがどっと侵入してきます。ですから私は、むしろ私有権を持って対抗したほうが良いと思います。その力が地方に十分でないというのが大きな問題だと思います。

私有の問題は日本の形成の問題で、先ほどの「農民とは何か」という問題とも深く関わっています、すごい問題提起だと思います。

また、深い研究が必要でしょうからひと言では言えませんが、私有の問題について、エンゲルスたちは「都市の労働者は、みんなが私有財産権を放棄して自分の労働力だけを持って都市に集まり、プロレタリアになって、この人たちがいずれ世界をつくりていく」という世界観を19世紀につくりました。ところが、これを20世



紀に実現しようとして農村で何をやったかというところ、コルホーズをついたり、人民公社をついたりして、農民の私有権の一切を奪って、全部国有地にし、農民を労働者にしたわけです。この考え方が根本的に間違いだということは、もはや中国でもロシアでも立証済みです。

つまり、私有財産に関する19世紀の思想は、破たんしていると言えます。私有といわゆる公共の問題に関して、本当に深く考えなければいけないけれども、今の経済学でも哲学でもまだ放棄されているように思います。

(\*)7 Friedrich Engels (1820~1895) ドイツの経済学者、哲学者、社会主義者。カール・マルクス (1818~1883) とともにマルクス主義を創設。

(\*)8 原タイトルは「Der Ursprung der Familie, des Privateigentums und des Staats. (4. Aufl.), 1884年」刊行。日本語訳は「家族・私有財産・国家の起源」新日本出版社 1966年など。

## 6. 「国是」より「郡是」に

(1) 「コミュニティを良しとする発想Ⅱ」郡是」中沢・また、コミュニティの問題についてですが、僕はこの間、京都府の綾部市というところから呼ばれてお話をしに行きました。綾部市は、いわゆる大本教(まほん)が発生したところ。

同時に、ここにはグンゼという有名なアパレルメーカーがあります。元々は繊維製品の大きい工場が発生したところで、グンゼの工場は日本の資本主義の中でも特筆すべきシステムです。かなり古い時期から、労働者をいわゆる賃金労働者として扱わないのです。女工の教育をはじめ、職工の福利厚生すべてを含め、綾部という町を一つの繊維産業を中心にした総合的・複合的な都市をつくらうとしたところなのです。そこで講演をしてきました。そのとき僕は次のようなことを考えました。

さんたちに高度教育を与え、保育システムをつくっていきました。それをやっていた会社がそこにあります。

僕はこの「郡是」という言葉が、非常に重要なのではないかと思うのです。「郡」という言葉は、コミュニティという言葉ですから、この言葉に関して、綾部の町はいろいろなことを考えたのです。

そして、郡是工場ではそのようなことを考えた一方で、大本教では少し違うことを考えたのです。世界には大きな屋根があって、その中で人間とほかの生物が共生していく大きな家なのだというイメージをつくり出していくわけです。郡是工場と大本教の二つが一体となって、綾部で展開されていきました。

(9) 1906年に開設した教派神道。開祖は山本翁。

(10) Robert Owen (1771~1843) イギリスの社会主義思想家、協同組合運動の思想的源流であり、「工場法」や「社会保険」などの創始者でもある。(新版 協同組合事典)

グンゼはストッキングの名前だと思っている方がいらっしゃるかもしれませんが、これは「郡是」という漢字なのです。「○○郡」の「郡」と「是非」の「是」を合わせた「郡是」という言葉で、創業者が自分の思想を名前に盛り込んだのです。つまり、「国是」ではないということです。当時は国是、あるいは私是、エゴの是だけで動いていく。この二つに両極端に分かれていたときに、「郡是」ということを言い出したわけです。つまり、コミュニティを良しとすることを第一方針としていくというシステムをつくったわけです。

そのための一つのモデルケースとして、「郡是」の工場をつくりました。これは、イギリスのロバート・オウエン(\*10)という、社会主義の原型をつくったような人の工場をモデルにして、周辺部の農村と、農村部から供給されてくる労働力、この労働力として工場に集まってきた女工

## (2) 資本主義と富本主義

中沢・資本主義がなぜ今のようになっているのか。資本主義の最初の頃は、皆さんもよくご存じのとおり、アダム・スミス(\*11)が『Wealth of Nations』(\*12)を書きました。この本は資本論の原型だと言われていますが、実はそうではありません。資本は Capital ですが、Wealth (富) と呼ばれているのです。この「富」という言葉が非常に重要で、しかも「郡是」と深く結びついていると思います。

漢字の「資」という字を思い浮かべてください。「次」の下に「貝」と書かれています。つまり、「次」の「貝」が「資」ですから、投資のことを指します。当時、貝は貨幣ですから、貨幣を投資して、次の貨幣という利潤を持って帰って来るという意味が「資」だったわけです。ですから、資本主義の「資」は「次」の「貝」なのです。



ところが、「富」という漢字を見てみましょう。「富」は上が家の屋根です。中に口や田がありますが、それは酒瓶のことです。つまり、屋根の下でお酒を発酵させているという意味です。「良いお酒をたくさん醸している家は富がある」という中国の概念です。

屋根の下で発酵させるというのは自然過程で、微生物がやっています。農業の原型です。発酵菌が農業をしているわけです。発酵菌が農業をしていて、そこから出てくるものがお酒です。米を通過してお酒までいきます。お酒までいくと、当時は最高の換金製品ですから、すぐお金に換えられます。つまり、「富」という字の中には、1次産業の大元になっている発酵菌から貨幣まで全部が入っています。それが大きい屋根に守られているというのが、「富」という概念です。

これに対して資本主義は、貝です。貝とは死と、これを考えた中国人は相当なものだと思います。資本と富本を二つに分け、「富」のほうが重大なのです。

同時に、お金を使う商人たちの活動というものもあります。けれども、一つのコミュニティに生きる人間は「郡是」という大きい屋根の下に行つて、お金を通じるとほかの世界へ広がっていくという構造になっていたのではないかと、今こうして、6次産業としてここで語られていることは、実はものすごく根深い思想を持っているものだと、私は考えます。

(\*1) Adam Smith (1723-1790) イギリスの経済学者、古典派経済学の祖。

(\*2) 原タイトルは「An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations 富の性質と原因に関する研究」で、1776年に刊行。日本語訳はサダム・スミス著、大河内甲監訳、玉野井芳郎、田添京二、大河内勝弘訳(2010)『国富論』(全4巻)中央公論新社(中公クラシックス)など。

### (3) 「腐るもの」が循環する経済

西村：ひと言だけ言わせてください。私はたま

んだ貝のことです。生命活動が終わった貝殻だけを取り出して貨幣にします。それは自分でたくさん保持することができず、金に換えたりすればすごく利用しやすいものになって、貨幣主義が発達するわけです。

この貨幣を元にした資本主義と、1次産業からお金にすぐ交換可能なお酒まで至るものを屋根、つまり「郡是」という屋根の下で行う産業というのは、大きな違いがあります。ですから、僕は資本主義に対抗するものとして、富本主義というのがあるのだと思います。

富本主義の「富」というのは、先ほどから話題になっている6次産業の考え方のバリエーションだと思っています。お酒づくりはまさに6次産業なのです。田んぼでお米をつくって、それを発酵菌の働きによって分解してもらって、最終的にお酒という高度な価値物に転換していく。それが「富」だという考えを念頭に置いてみる

たま京都出身ですので。綾部と隣の福知山は京都府の中で最も出生率が高いのです。それはやはり、先ほど製造業が意外だったという話をしましたが、今ちょうど福利厚生費と出生率の関係を調べていて、データは取れないのですが、福利厚生をすごく大事にするゲンゼというところでその可能性があると、お話を聞いて意を強くしました。

中沢：綾部の研究を一緒にしませんか。

西村：そうですね。広井先生にもぜひ、今のお話についてコメントをいただきたいですね。

広井：今の中沢先生のお話は非常に印象強く、感銘をもって伺いました。西村先生が出生率が高いという話もされたので、余計にリアリティをもって受け止めました。

連想したのは、2〜3年前に出た『田舎のパン屋が見つけた「腐る経済」』という本です。脱サラして岡山や鳥取の方でパンづくりを始め



た若い人の本で、私は非常におもしろく読みました。中沢先生のお話とそのままつながるのですが、世の中にあるものはだいたい、農産物も含めて腐るのが当たり前で、それが循環していきます。やや単純化して言うと、世の中に腐らないものが一つだけあって、それが貨幣です。貨幣は腐らないどころか、どんどん増えていく。この本では、本来の「腐るものが循環するような経済」のほうで、「腐らないものがどんどん大きくなっていく経済」よりも健全なのではないかという趣旨で書かれています。パン屋としての実践も踏まえた上での、しかも資本論も参照しながらの議論なので非常に説得力があるのですが、今の話とまさにつながってくると思いました。

希望を込めて言えば、先ほど内藤理事長が若い世代の話をされていましたが、彼らはわりと起業意識や社会貢献意識のようなものが

高く、ソーシャルビジネスについても前向きです。私が前々から思っているのは、30代くらいの人まで含めて今の若い世代でソーシャルビジネスをやっている人たちの言っている内容の言葉が、実はどうか奇しくもどうか、渋沢栄一（栄一）など日本の資本主義の原型をつくった人たちが言っているような内容と非常にシンクロナイズしています。経済と倫理のようなものが、まったく別ものではなく、相重なるものかどうかです。

今の話を経済と倫理という角度から見ると、経済と倫理は元々、「三方良し」みたいなことも含めて、融合していたものが一旦切り離され、どんどん分離していったものが今、また結びつくような、そういう局面になっているのではないかと思います。「腐る経済」や循環ということもつながるかと思います。中沢先生のお話も、その点から見て改めて非常に考えさせら

れる、興味深い内容として受け止めました。

中沢…一つ付け足すと、なぜお米だったかという、お米は腐りにくいからです。それまでは芋でしたから。芋や粟はわりあい日持ちしますが、基本的に芋は腐ってしまうのです。僕は学生のとき、よく人類学の調査をしていましたが、ポリネシアの方の首長さんの財産は芋でしたが、芋小屋をつくって保存しているのですが、いっぱい集めれば集めるほど腐ってしまう。そういう難問がこの島の世界の矛盾であるという研究結果がありました。

なぜ、古代国家も封建国家も米を重視したかという、お米は腐らない。しかもお米は酒に変わる。これは非常に重大な要因だったと思います。金は、残念ながら金でしかありません。しかし、お米は貨幣の機能も持ちながら、同時に発酵菌の働きを通じると6次産業に変容していきます。その意味では、かなりオールマイティ

なものとして愛好されたのだと思うのです。なぜ、日本人がこんなにお米に惹かれてきたかという原因はそれなのだろうと思います。

(※13) 渡邊格(2013)「田舎のパン屋が見つけた「腐る経済」」講談社  
(※14) 浅沢榮二(1940~1991) 実業家・社会事業家 第三国立銀行の設立に携わり、近代日本の実業界の基礎を築いた。

## 7. 1次産業が持つ価値

川井…ありがとうございます。最後のお話はかなり興味深く、本日のテーマにもすごく合致するところに来たと思います。中沢先生から「郡是」というお話があり、これは「国是」ではなく「郡是」だというお話がすごく印象的でした。これからのコミュニティづくりは、そのコミュニティにおける地域力・人間力というものの力が強さが問われているのではないかと思います。

また、人口が減少し高齢化していく町の中で、そこだけで踏ん張ってできるのかというと、や

はり先ほどのオープン・クローズドの話も出てきますし、科学を利用するとか、ITも含めて外に開いていく、つながっていくという話も出てくるのではないかと思います。

それから、内藤理事長からラオスに行ったときの若い人たちの話がありました。これは中沢先生のお話ともつながるのではないかと思います。どうやら日本人という民族は、意外とアジア地域で交流できそうな人たちが分散してたくさんいるという気もしました。これについて中沢先生に振るとお話が長くなりそうですから、今回は振りませんが(笑)。

もう一つ言えることは、今、何かもやもやとした不信感と言いますか、国の中で起きています。たとえば憲法改正の問題や経済の問題なども全部そうなのですが、何となく上から下へと向かうベクトルの流れが全然変わっていないような気がします。別に政権批判をするつもりはない

のですが、いささか逆戻りのな雰囲気も感じ取れます。「これからは高齢化して人口が減ってくるのだから、総活躍の時代をつくらなければいけない」みたいな話を聞くと、何かもう「年を取っても、とにかく稼げ」と言われているような気がしてくるのです。そうした虚しさのよ

うなものが私の中にも何となく残っていました。その点で、最後のお話の展開の中で「国是ではなくて郡是なのだ」と言われたことは、今、まさに日本社会が問われていることそのものではないかという気がしています。ですから、下からの本当の民主主義の力によってこの国の将来像を、いかにデザインしていくのかを考える時代が、まさに今、到来しているのだと感じられます。

そのためにも、さまざまなるハードルがあり、世代間の意識の違いや、何か抵抗勢力になってしまうような壁もある、という状況であっても、

私たちはそれを乗り越えていくような地道な活動を、実験的にでもいいから少しずついろいろなところで試していかなければいけないのでは



川井 真

ないかと思つた次第です。ここで内藤理事長、ひと言お願いいたします。

内藤・今、6次産業化と言って、いろいろなところでさまざまな取組みがされています。ただ、富の話や郡是の話を聞いて思つたのですが、本当に身の丈に合った6次産業化ということを考えたとき、「自分たちは何のためにやっているのか」「何を信条に、何を是としてやっているのか」をきちんと考えて6次産業化をすれば、その地域にしかないものが生まれますし、みんなが「すばらしい」と言つて価値を認めてくれるのではないのでしょうか。これは単に食品メーカーをつくっていく話ではありません。ただ単に原材料を加工して、販売して、付加価値を付ければいいとなつてしまうと、これはもうまね・物まねに終わつてしまつて、誰もがすばらしいとは思いません。

そうすると、6次産業化の意味を本当に考え

から何までやる必要はないのではないと思えるのです。形態として一つのモノができ上がる、あるいは一つのサービスが完成するとき、何人かの、場合によっては法人も違う人たちが絡み合いながら、一つの価値が生み出されていくという「高次元産業化」も、これから考えていかなければいけないのではないかと感じました。では最後に、本日のインキュベーター役でもある中沢先生にひと言いただければと思います。中沢・前々回のシンポジウム<sup>\*15</sup>でもお話ししましたが、なぜ農業・漁業・1次産業なのかということを考えてみると、先ほどは発酵菌のことを言いましたが、富というのは要するに、人間の世界の循環とは異なる、大きい循環の中で動いている世界があつて、そこに接続回路をつくっていくことが大事です。

そうすると、今の資本主義の最大問題というのは、人間の世界で閉じてしまうことです。経

て、その富をつくる。「地域でいったい何があのか」「地域の考え方はどうなのか」「今まで何をやってきたのか」ということをきちんと考えて6次産業化をすれば、ロットは非常に小さいかもしれないけれども、多くの人に評価される、感銘を受けるものができていって、成功するのではないか。今お話を伺つていて、そう思いました。そうしたことを考えた上で、6次産業化をぜひやってもらいたいというのが希望です。

川井・私も今、いくつかの企業との研究会に顔を出していますが、正直言つて、それはシェアードバリュー（共通価値）の研究なのです。シェアードバリューをつくり出すために何が必要かを議論していると、ネックとなるのは、やはり社会との関わりをいかに形成するか、という課題なのです。

そういう意味では、6次産業もまた1人で何

済の世界で閉じてしまつて、しかも今、その閉じている領域がものすごく狭く、お金という領域に狭まっています。そして、温暖化が進む地球や人間の生命などの問題が、資本主義からは切られているということが重大な問題になっています。

今、資本主義がどちらに変わつていかなければいけないということを考えてみると、この人間化されない世界の中に通路をつくつていける資本主義、それが先ほど言った富本という考え方の一番のアイデアで、酵母菌がやっていたことです。それを人間がやろうとして、1次産業が担っていたわけです。しかし、いくらお百姓さんが頑張つても、天候不順が続いたり、蒔いた種が満足なものではなかったりすると、収量は上がりません。

いわば庭師さんと同じです。人間が自然に働きかけて、自然の生育を助けるという働きを



行っているわけですから、農業者、漁業者というのはいつても、「自然」という大きなサイクル、広井さんのおっしゃる「自然」という概念に回路をつくっていく産業だから重大なのだと思えます。

これは、1次産業以外にはできません。2次産業、3次産業と言われているものは、自然循環の中に自分を結びつけていくことができないわけです。資材・生産材料が現地から調達されて、工場に集まってくる2次産業。3次産業はその上に立って販売されるという形です。つまり、1次産業だけが人間の世界よりも大きい自然サイクルの中につながっていく回路をつくっています。ですから、富本ということを考えてと、農業は一つのモデルになっていくだろうと僕は考えています。

僕がなぜ、JAの研究と一緒にやっているかと言うと、農業・漁業・林業はたいへん長期に

## ● 質疑応答

川井…ディスカッションではいろいろな話題が出てきました。ご質問、ご意見など何でも構いませんので、ぜひ会場からも積極的にご発言いただきたいと思えます。

—— 成熟した社会にしていくために、一人ひとりができることは何か

参加者A…新しいコミュニティづくりを目指して、何をすべきなのでしょう。縮小するということだけは、どう考えても確実です。問題は「発展」という概念も求められるのかどうかです。私自身は、今日はひと言も出てきませんでしたが、「成熟」ということでしょうか。恐らく「成長」ではないと思います。もちろん、移民政策とかを取らないという前提です。胃袋も減っていく、財布も減っていく。そうした中で

羽振りが悪かったのですが、今後のことを考えると、人間にとって最も重要な産業の形態になるからです。今は、羽振りが悪くなった状態を何とか回復しようと思って6次産業化を訴えています。6次産業の先にあるものと考えてみると、農業・漁業・林業の価値というものも再発見につながっていく、最初に言った「資本主義がどちらの方向へ向かっていかなければいけないか」ということの一つの回答ではないかと、僕は考えています。

川井…ありがとうございます。

(\*15 平成25年度JA共済総研セミナー「自然と人間の協働による持続的な地域社会づくり」(2014年3月12日開催)  
講演録は「自然と人間の協働による持続的な地域社会づくり」食・自然エネルギー・ケアでつながる新たな生活基盤の可能性を探る」(2014年10月発行)を参照のこと。  
<http://www.jkri.or.jp/report/ber/201410.html>

どう展開していくか。いわゆる太った経済というか、消費でもいいのですが、その中で「発展」という言葉が私にはなかなかピンとこないのです。

その中で地域がどうしてもやっていかなければならない場合、相互扶助や絆など、人々の新しいつながり方で知恵を出したり、労働を出したりすることが、ある面ではしなやかな強さに通じていくのではないかと思います。その中で、我々の創意工夫が必要になってきますし、地域がある面では責任と権限をもっと付与されて、自分たちでやっていくというようなことが逆に求められていくと、僕は結論的に思うのです。

私の理解不足かもしれませんが、ここで別に結論を白黒つけようという意味ではありませんが、今日のお話を聞いていて、そういう形の収斂というか何か方向性を、まとめるところでしていただければと思いました。

—— 家族を超えて、  
近所の人たちと関係を持つよう

西村：今のご質問に対する私の答えは、「家族を超える」です。

これから間違いなく若い人が減っていくし、人口も減っていきますから、残った人間同士で助け合う必要があることは誰でもわかっていきます。でも、それをやろうとしたとき、具体的に何をしたらよいかというと、非常に卑近な話で恐縮ですが、今日の夜、隣の人と一緒にご飯を食べるなどの行動です。本当はこれは大都会のほうが大それたと思っています。

今まで、ご飯は家族で食べていました。ところが一人暮らしがどんどん増えてきました。今後もますます増えます。そうすると、いわゆる孤食の時代が間違いなくやってきて、資本主義は孤食に合わせた商品を開発してくるはずですよ。

でも、それは違うと思います。

つまり、隣の人と一緒にご飯を食べる頻度を増やす。毎日一緒に食べるとは言いません。しかし、頻度を増やす。それは、地方で隣の家と場所が離れていても、あえてそこまで頑張っただけで移動して一緒に食べる。私の提案はそういうことです。

要するに、今は家族がかなりコミュニティづくりのかせになっていっているのではないかという気がするのです。家族そのものが悪いという意味ではありません。隣と人と一緒にご飯を食べると、家族で食べるときに「ああ、家族でよかったね」とありがたみを感じることも含めて、私は家族を超えて近所と関係を持つことを提案したいと思います。

—— どのような社会をつくっていくのか、という議論を正面からしているよう



西村：日本語で「家」という古い言葉がありますが、これは「家族」という意味ではありません。家の存続というのはいすごく大事で、養子を取ったり、隣の人が入ってきたりするものが「家」で、これが一番重要な価値でした。それがいつの間にか「家族」にすり替わった時期がありました。その家族が今、内部で解体し始めてしまいました。先ほど「ここから先、日本人はどうしていったらいいのか」とおっしゃっていたことは、「家」ということではないかと思っています。

さて、広井さんは、「鎮守の森構想」「鎮守の森の問題に取り組んできましたが、これはかなり具体的に「今後のコミュニティの人間関係をどうしていくか」ということに関わっていると思います。それについてお願いします。

広井：今の質問との流れも含めて、「これからどういうことに価値を見つけるのか」についてお話しします。今日は時間の関係もあって十分

に話せませんでした。が、「どのような社会をつくっていくのか」というような議論を、正面からする必要があると考えています。「成長に代わる価値は何か」ということで、「幸福」という話をしたのもそれについてで、今、日本人は本当に幸福か、幸福の意味は何か、どのように幸福を実現していけるかというあたりが一つの基本論になります。

具体的な一つのツールとして、私が鎮守の森に取り組んでいるのは、私は日本人の一番の根底にあるのが、自然の中に単なる物質的なものを超えた何かを見出すような自然観のようなものです。身近なところではジブリ映画のようなものもそうだと思います。しかも、鎮守の森は、コミュニティや祭りといったものともすべて結びついています。講演でお話ししたように、全国にコンビニの数が5万であるのに対して、鎮守の森は8万もあり、非常に身近な存在でも

きた。その名残が高度経済成長です。日本海側から集団就職で「金の卵」と称して、東京へ集めたわけです。太平洋ベルトに集めたわけでしょう。それが先ほどのピークかもしれません。そうした中から、今度は個人をどうするか。あるいはコミュニティをどうするか。「コミュニティ」という英語の単語は難しいのです。日本語で一番合うのは何でしょう。僕は「地域」ではないと思います。「世間」だと思っています。つまり、得体のしれないものなのです。その得体のしれないものが、もし、コミュニティづくりという言葉に置き換えられたらどうなるでしょうか。ちょっと心配です。もう少し具体化したほうがいいのではないかと考えています。その意味で、僕は協同組合法を少し勉強して、現に『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』<sup>(\*)16</sup>によく目を通しています。その両方の性格をもつて協同組合 (Genossenschaft) が出てきたとい

あります。

私の場合は自然エネルギーや鎮守の森セラピーという形でやっていますが、そういったものを再発見していくことが、日本におけるコミュニティのあり方を考えていく、かなり大事なツールになるのではないかと思います。しかもそれは、西村先生の言う家族を超えた、自然なども含めた家族を超えたつながりにもなってくるということ、取り組んでいるところです。

川井…ありがとうございます。

——協同組合には、地域創生の中で役割を果たす潜在能力があるのではないかと

参加者B…僕は専門が法律ですから、ちょっとだけ感想を述べます。ようやく民主主義が入って、市民社会が入ったのは戦後です。つまり、個人をどう評価し、つくり上げるかということ、戦前は憲法体制の下で何も考えずにやって

う、そのところに協同組合の強さがある。あるいは地域創生の何かヒントがありそうです。つまり、資本主義社会の営利を追求するような仕組みとともに、相互扶助や「お互いさま」を大事にするゲマインシャフト、その中に血と家と精神のゲマインシャフトがあるといったのがテンニエス<sup>(\*)17</sup>です。その3つを我々はうまく協同組合システムの中に取り入れていたら、少し地域創生の中で役割を果たす潜在能力があるのではないかと私は考えています。それが私の感想でした。

川井…ありがとうございます。

(\*)16 原タイトルは「Gemeinschaft und Gesellschaft : Grundbegriffe der reinen Soziologie. 1. abt. 1910」。

日本語訳はエドワード・ティンニエス著、杉本原寿訳（1957）『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト：純粹社会学の基本概念』（上・下）岩波書店（岩波文庫）など。

(\*)17 Ferdinand Tönnies (1854-1936) 『ドイツの社会学者』

——協同組合には、人々の暮らしの動きを  
「地域」へ開いていく力がある

川井：今日はケアの問題についてはあまり触れられませんでした。本当に都市はこれから喫緊の課題になっていくと思います。先ほど西村先生が少しお言葉に出されたコミュニティという言葉、確かにどう表現していいのか難しいところがありますが、その地域力や人間のつながりにある程度依存しなければならぬ状況に、相当来ていると思います。たぶん、ケアをされる側とケアをする側のバランスが、かなり大きく崩れています。

西村先生は、地域包括ケアの委員会の座長もされていらつしゃいますから、今、一番重要な課題かと思えます。たとえば今、都心部にある団地問題にしても、まったく手が着いていないのが現実です。ですから、確かに我々はどこか

りません。これは元々ヨーロッパの協同体、山村などのコミュニティの標語です。それを「これは自分たちの事業にとつてはいいかもしれない」ということで、協同組合は歴史的にそういう場所から生まれたのだと思うのです。ですから、非常に密接に生活している場所、その中で生きるために必要な、言葉で言えば経済、オイコノミーの部分です。そうしたものを受け継いでいるのが協同組合ではないかというのを感じます。

あとは、地域創生の話の中で「家」の話が出ました。今、宮城のある都市で取り組んでいるのですが、農村の地域を活性化するために家単位でやるのは、もう困難なのです。高齢者ばかりでは、やれることにも限界があります。そこで提起したいのは、「地域住民の暮らしにおけるベース部分の動きの単位を、家から地域に変える」ことです。そのためには、若い人間の「接

らはじめていったらよいかわかりませんが、経済の動きだけではどうしても解決できないものがたくさん残っています。それらも踏まえて、よい議論になってご参加の皆さまと一緒に考えられたらうれしいと思つた次第です。

では、もうお一方、お願いします。  
参加者C：これまで中沢先生の本をたくさん読んでいましたが、お会いするのは今日が初めてです。人類の英知の問題とか、いろいろなことが全部出てきましたが、協同組合関係者で「協同組合は、人類の英知の正当な後継者ではないか」と言つた人がいます。城南信金の吉原(※18)さんなのですが、今日聞いていて「本当にそうだなあ」と思いました。

確かにコミュニティの相互扶助の問題、広井先生や西村先生もおつしゃいましたが、協同組合がよく使つている「一人は万人のために、万人は一人のために」は、協同組合の標語ではあ

着剤」がどうしても必要となります。そうした接着剤として、ワーカーズコープの協同労働が小さいながらも動き出しています。

例えば、今取り組まれているのが山林問題です。どこまでが自分の土地かまったくわからないから、道をつくろうとしてもつくれないうわけ、それをきちんと整理する行政の力も必要となります。実際に道をつくろうとする人がいるのだから、ぜひ、何とか協力してくださいという形で取組みが進められています。

そういう活動が兵庫県や広島県で進められつつありますが、こうした点でも協同組合、協同した働き方というのは、実際、大きな力になるのではないかと思っています。

川井：よろしいでしょうか。もう少しいろいろとご意見を伺い、ご質問にもお答えしたかったのですが、残念ながら時間がきてしまいました。恐縮ですが、ここでディスカッションを終わら



せていただきたいと思います。中沢先生、西村先生、広井先生、ご来場の皆さま、今日は本当にありがとうございました。

(\*18) 城南信用金庫・吉原毅相談役。同信金理事長を2015年6月まで務めた。東日本大震災を機に「原発に頼らない安心できる社会へ」を掲げ、省電力、省エネルギー、代替エネルギー開発利用の支援・推進を経営方針として打ち出したことで知られる。主な著作に「原発ゼロで日本経済は再生する」KADOKAWA（角川oneテーマ21）2014年、など。